

えきまえじょうかく
 上越新幹線・上毛高原駅



『日本城郭大系』に掲載されている縄張図

図中、橙色点線のあたりに上越新幹線が走っている。駅設置に伴って整備された道路は、現在「二の丸」を寸断して南北に縦走している。侵食崖もコンクリートで固められて、だいぶ様子が変わっていると思われる。

おがわじょう

小川城



「本丸」(西から)



南側の折れ(上図○)

上毛高原駅前から徒歩3分くらいのところにあります。城跡のある場所は利根川が形成した河岸段丘上位面で、現在は集落や耕地が開けていますが、こういう景観になったのは地理的にみて新しいことです。

この段丘面は利根川からは数十メートルの高さがあり、まさに天然の要害といえます。このあたりに人間が住み着いたのは古く、城跡東側の低位段丘では縄文時代の遺跡が発掘されて遺跡公園に整備されています。

「本丸」には北側に土盛りしき土盛が残し、その東側に3m弱ほど低い「ささ郭」があります。「本丸」は上右の写真のように、「二の丸」との間に深い堀が切れ、南側には折れが設けられています。山崎氏は上図○のあたりに虎口を想定しています。今でも「二の丸」からはこの堀底に一旦降りて、「本丸」に登ることになります。

「本丸」と「ささ郭」では郭内の平坦面には密に花木が植栽されていて、「城マニア」には少し不満に感じるかもしれませんが、公衆トイレなども設置され一応整備されています。でも、すぐ近くにある月夜野町郷土歴史資料館では小川城に関する目立った展示がありませんでした。有名な名胡桃城については参考となる資料が展示されています。

<参考文献：山崎一『群馬県古城址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972>



現在「二の丸」は畑となり、広く平坦な空間となっています。「真田伊賀守陣屋跡」とされる場所には石の祠が鎮座しています。その台座には70cm四方ほどの面取された石が使われています。

真田伊賀守は沼田城主真田信之の孫信利で、寛永16(1639)年から明暦3(1657)年までこの場所に居住していたということです。その際、彼の邸が「二の丸」に設けられたということです。狭い「本丸」を避けたのでしょうか。その造営にあたり小川城が改変された可能性はあります。

さてこの城の来歴を参考文献に従って記すならば、沼田景久の子景秋が明応7(1498)年に築き、小川氏を称したのに始まるといいます。大永4(1524)年に沼田小川氏が滅ぶと、その後、小川郷とは関係のない浪人赤松可遊齋が小川衆に推挙される格好でこの城に入ったということのようです。そして可遊齋は小川氏を称すようになります。この城に興味をもつのは、可遊齋がもともと播磨赤松氏の縁者らしいことです。

名胡桃城争奪戦でも想起されるようにこの地域は越後・甲信・武相の戦国大名間で角逐場となりました。関東と日本海を結ぶ要路上に位置していたことと無関係ではないでしょう。こういう場所には可遊齋のような者がはるばる「一発当てる」ことを期待して流れ込できていたのではないのでしょうか。城によってはその目的などから勘案して、可遊齋のような漂泊者が差配した方が得策な場合もあったことでしょう。

現在、日本各地に「道の駅」が造られています。小川城は、「道の駅」ならぬ「道の城」というところでしょうか。上越新幹線の駅がすぐ目の前に設置されたというのも、不思議な巡り合わせのようです。

上；「ささ郭」の南に残る土塁。丸い川原石が見られる。土留で使用したのか、もともと土石混築なのか。

中；「二の丸」の西方向から見る。矢印が「本丸」。山崎氏はこのあたりまで外曲輪が広がっていたと想定。

下；中写真の畑にある石祠。真田伊賀守邸跡とされる。



"Shiro Fumi" No.37 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.